

表紙, 目次, 通信, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38309

大正二年

發行

第八卷

自第八四号
至第九五号



中央學會雜誌

第十八卷
第一號
(第十八號)

臺灣醫學專門學校中央會

十全會雜誌(第十八卷第一號) 目次

○原著及實驗

●肺結核患者血液所見ニ於ケルグラウツイツ氏ノ學說ニ就キテ

ドクトル 竹中繁次郎 一

○通信

●山本直枝君通信。●林篤氏通信。●富山同窓會記事。

○校內雜報

●講話會例會。●那谷ゆき。●醫科四年忘年級會記。●卒業證書授與式。●圖書室月報。●支那語研究會。●須藤、石阪、土肥三教授を迎ふ。●土肥教授暑歷。●石阪教授暑歷。●金澤病院の發展。

○叙任及辭令

●内閣。●宮内省。●文部省。●金澤醫學專門學校。

○人事

●研究生許可。●陸軍依託生。●海軍軍醫學生。●安藤佐吉氏。●鈴木正孝氏。●板谷外之助氏。●岡田申吉氏。●杉原周輔氏。●轉居會員。●居所不明會員。

○會告

●校外特別會員會費調書。



(24) 竹中「肺葉抽出後ノ瓦斯代謝ニ付テ」東京醫學會雜誌第二十五卷三號 1911.

(25) H. Moellgenl. Ueber Emphysem und Hypertrophie nach Exstirpation der einen Lunge. Scand. Arch. f. Physiol. V. 19. 1907.

(26) Inagaki. Die Veränderungen des Blutes nach Blutverlusten etc. Zeitschrift der Biologie. II. Bd. 1907. od. Hermann. Jahres-

bericht über die Fortschritte der Physiologie, Bd. XVI. 1907.



通信

● 山本直枝君通信 (四十二年卒業。同級生宛)

第一信

拜啓益々御壯健御研學の段奉賀候小生歸地出發以來已に二ヶ月海上無事に各港を經過致し去る一日マルセーユに上陸二日鐵路ストラスブルグに到着林教授に迎へられて久々異境に温き握手致候尙一週間滞在上當地を出發可致目下留學地決定に付交渉研學致居候各港にては詳細御通信可致存候へ共飛ひ歩きに忙敷く兎角尻か座り兼ね今日迄打過き候次第不惡御容赦被下度候。

航海平穩にて只一度支海で些か當てられた切りサイテン灘は少し揺り候へ共最早船に順れ一度も食堂の通勤を怠らず同行の二三ホロ辭機嫌ありしの

みそれさへ小間物屋は一軒も見當らず愉快に通し申候是れでも先年房州の沖で大枚三拾五錢の晝辨當に剩錢つけて吐き出したる強者に御座候暑さも強い強いかさりとて聞いた半分もなく印度洋は反りて涼みかてらに通り申候

上海に着いたのが八月の二十一日獨乙行五人打連れ早速上陸「ونس」塗の支那人力車に乗じ豐陽籍と云ふに落付申候東洋第一の都と聞いて来たがして立派にも思はず只沿道の巡查と陣笠かふりたる支那巡查は目につき申候五人とは長醫教授林君徳島開業三浦君京法大助教河田君東京開業鈴木君と小生を加へて五人組若い者同志にて頗る氣が適ひマルセーユ上陸迄終始行動を共に致候此日馬車にて市内を見物致し翌日瀛車三時間蘇洲に遊び五人顛馬を連れて孤蘇城外の寒山寺を見物致し日夜上海に歸り翌朝歸船出帆致候四日間更に鳥影を見ず退屈なる航海の後香港に上陸ケーブルカーに乗りジヒークに昇り港内を眼下に見下し申候此町は遙に上海より立派にて歐羅巴風に覺ゆ申候翌朝錨を抜いで新嘉坡に向ひ九月一日入港早速上陸碩田箱に投じ晝飯後馬車を雇いて植物等を見物致候沿道熱帶植物繁茂し大に氣に入り申候其夜は番頭に案内させて有名の花街を見物致候日本の女多數をしめ苦々數感し候西洋の女郎僕等の一隊を見て云ひも云つたりアナタアノネミアヤツリ申候翌朝自働車を雇ひ市の北外にある椰子林水源地等を見雄大なる熱帶の景色を賞し候上歸船出航翌日ベナンに上陸馬車を雇ひ植物園動物園博物館印度寺支那寺を見物致し候馬車と云へば立派に聞ゆが半裸の黒いのが御したるガタ馬車に御座候それでも形は馬車だけに何だか景氣つき申候香港以西は到處英語通用致し毫も不便を感じたる事御座なく候乞食迄かマスターマスターと云ふて錢を乞ひ申候

此處を發してより六日錫蘭島コロンボに着す天空とは此所の事である人間は眞黒で恰も金佛様の如し然もみんな釋迦様の顔に似て居るから妙である人力車を雇ふて公園博物院を見海岸にあるガールフェースホテルで晝飯

を食ふた食堂に三百人を入るゝに足る毛唐の紳士淑女充滿し其内に混り込んたる小生等の格好は赤毛布も昔ならざる云ふ有様にて些か氣が減け申候翌朝クキンスホテルの案内者に導かれてカンデーに釋迦の古跡を訪れ申候瀛車馬車代晝食代を合して英貨一封にて請負をやつて呉れるのは誠に簡單だが先生大分儲けるに違ひ無之候瀛車四時間午前十一時半カンデーに着しクキンスホテルにて晝飯を喫し親聖の池を一周してパラダアリガア寺に行く入口には乞食群をなし頗りに憐みを乞ふ薄汚き味噌スリが出て來て英語で案内をやる此所を出て向ふ側の釋迦の坐禪したり云ふ菩提樹の下を通り抜け馬車に乗してカンデーの一つ向ふの驛村にある植物園に向ふ沿道娼家軒を並べ折ふし黒いのか白い齒をむき出して手招きをするを見て縮み上り申候此所の植物園は世界第一とも云ふべきものゝ由さすかに立派なるものに候カンデーよりコロンボに至る間七十哩沿道山又山其雄大なる山水は根から日本さば舞臺か違ひ申候コロンボを出て七晝夜水天の間を航し九月二十日アデン沖を經過し右に亞刺比亞左に亞弗利加を眺め廿五日スエスに達し二十七日ポートサイドに着す夜半なれどもシヤンパンを雇ふて市内をアラはき廻り佛蘭人の繪葉書屋伊太利人の店をたゞき起してひやかした夜の白々とする頃船に歸れば間もなく錨を抜いで地中海に入る廿二日午前伊太利メシナの海峡を通る右にメシナの川を眺め伊太利の沿岸に沿ふて航する事約五時間大小の人家相連り山薄緑にて恰も油繪を見るが如くレザガの町に來た頃は海岸を通る人影さへ手に取る様に見へ先年地震に壞れたるルイーネ慘憺と横るを見申候

園等を見物歸宿致し候茲のボーイは燕尾服をつけて給仕致些か底氣味悪く感じ財布の口を押へ申候
午後十一時ホテルを出て、伯林行の林、河田兩君とクツクの案内者に導かれてマルセーユを發し申候瀛車は歐洲に似す頗る不潔にて二等室三人詰の所へ同勢三人の前に赤いのが一人瀛車が出るさ晝の勞れで午後二時頃まで眠つたウストラ寒いでフト目を醒すさ二人はタワイもなく睡つて居る向ふ側の異人さんだけ一人ホントは此方が異人である目をばちくりさせて居て待て居ましたさばかり佛蘭西語で何やら云ふシユタパンパフラーセイト云へば今度はそんなら獨乙語を話すんだらうさほつきりした獨乙語で云ふ茲に於て仲好しになつてあれこれ語す佛蘭西人は不潔さか車掌は不親切ださか先生中々こぼす睡つたり喋つたりして居る中に夜は白々と明け午後六時云ふに獨乙人は茲で乗り換へてシユンヘンへ行くさて別れた自分は林教授に電報をうたうと思ふて瀛車から降り物の判り相な顔をして居るのに英語で聞いても獨乙語で聞いても皆目通しない今度は速成の佛蘭西語で聞くさ今度は通したかしらないが向ふの返答か此方へ通しないまよつツラカル迄行つて見るさ構内を突端迄行くさ其所にテレクラフミ云ふカンパンがかゝつて居る此所で英語が通した電報を打ちて構内を自分の瀛車へさ來て見るさ自分の乗つた列車切りはなされて其所等に見えない些かダチ〜さ面喰つたが向ふの方の窓から林君と河田君が呼んで居る御蔭で迷ひ子にならんで濟んだ瀛車は油繪の様な佛蘭西の景色を逢ふて凡そ日本の瀛車の二倍の速力で走る田舎のステーションまで瀛車が兩側になつて留る時は窓から面をだしやがつてジャポネ〜と云つて物珍し相に凝視する此方へ來ては此方が毛唐なのである中には窓の所まで御苦勞に見に来る奴もある午後二時ベチクロワの停車場より國境を越へ十分位でアルトミユンスタ一の停車場に着き税關の検査を受し僕等が革靴にトクトル何某と書いてあるのを見て一つも開かずに通し申候茲にて佛蘭西の金を獨貨に兩換し申候

茲よりは人間がガラーと變りイカメシキ冑冠りし獨乙の巡查赤帽の体格偉大なる車掌にはビスマークの様なが乗り込み申候國境を出てよりは景氣頓に變りツイセ村の飛び飛ひに散在したる其間に教會の屋根の突出する畑には収獲のウズ高く積み上げられたる百姓の馬車昔ホツクの本で見た其景色其儘である鴻の鳥でも居そうな百姓家の屋根パノラマは其れからそれへと變り午後の四時過車掌が此次で降りるんた云ふので面喰つた實はマルセーユでクツクは六時ストラスブルグ着だ云ふたから其積りで電報をして置いたのをや聞かせぬと云ふたつて始まらずそうかして居る中に着いてしまつた仕方かないから茲で罷りて伯林行の二人を見送り赤帽に命して荷物を受取らし馬車を雇はせバウルラーバンドスターテンと云ふさやーとばかりに驅け出した三十分も走つたと思ふ頃フラウセルンの前で車を止めた車の音を聞いて大分年寄りしいもの奇麗な御婆さんがドクトル林の所へ来ただろと云ふて下りて来た生憎半月前に引越された話。今日打つた電報は廻して置いたと云ふトクトル佐々木が茲へ行けと云ふたのかと急いでゐる中にも先生の話までした再び車を返しメルラストラーゼの下宿に来ると正しく教授の下宿が不在である年取つた婆さんかも少しするど歸られると云ふから茲に荷物を預けて再び徒歩で停車場へ引返しブラットホームに入るさ今しもパーセルより六時半の瀟車かつてゐるその人込の中を林教授が彼方此方探して居らるゝのが見へる即ち線路を隔て、呼び茲に一年振異境に温く手を握り合ひ互に健康を祝し合ひ申候

爾來此處に留る事一週日に日々市内を逍遙致し佐々木先生の通信にありし當地第一の名物ミュンスターを見物し大學にてはシユミョーラベルの教室松原教授の先年來られしと云ふウオルンベルの神經科さては佐々木教授が此二番目の窓に座つて勉強されしと云ふホーフマイスターの醫學をを見申候先日ば電車にてライン河岸に來りラインツルドを逍遙し申候此地のガラセリ公園中々立派にてゲンセリゼの銅像は名物の様に御座候

林教授と一所に話して居ると西洋に來て居る感じかなさず時折大聲に話し行く獨乙語に驚かされ外國に來て居るを氣つく位談笑中々盡きものに無之候

コトラスブルグにて

山本直枝

同窓諸兄 机下

* * * * *

第二信

時下寒さに向ひ候諸兄如何御起居被遊候か小生儀俄かにハイデルベルグ行を見合せ此處ミュンヘンに舵を曲げ先月十二日林教授に送られて一人寂しくストラスブルグの夜瀟車に投じ申候

ミュンヘンは内科最も優勢にて斯界の拳斗ミュラー教授。物質代謝のノイバウエル教授。理學的療法のリーデル教授。血液染色にて名あるマイ教授あり、第一は連中多きに過ぎ、第二は結構だが邦人には不向きだとの話、第三は小生には門が違ひ、小生はマイ教授の「ラポトリウム」に勉強することに致し候、外の教授も「クリニク」を覗く位は出来申候、即ち教室に教授を訪ひ爾來面倒を見て貰ふ承諾を得握手致候、内科は各分科致居り候へ共小分科致さず各内科各種の「ラポトリウム」を備ひ規模頗る廣大殊に當科建築らしく誠に奇麗に候

さて話が後もごりして、「ストラスブルグ」の十日間は林さんの下宿に寢起きして寒き獨逸の秋の日を温く過し候へども亦袖を分つ事と相成り停車場の「ブフェー」に別盃を奉げ申候、教授の姿が幽かに／＼に途に見えずなる迄帽子を振つて別れを惜み申候、座に歸れば同室の獨逸人理癡して一語をも發せず、アツペンライヤミカル、スルーエで二度迄思ひ掛けなき乗換に逢ひて面喰ひ翌朝七時途方もない大きな停車場に荷物と共に降され候便り

さするは須市にて買ったミュンヘンの地圖一枚。心細くもそこに居たト
レーガーを呼んで荷物を「アウフベアールンク」に預けさせアラミ民賢の
町に彷徨ひ出で地圖をたよりに大學から餘り離れて居ない所を下宿探しに
廻り候、貸間の札は殆ど家並にあるが借而氣に喰つた所はない。何軒も冷
かした揚句漸く現今の下宿を撰んで午後停車場から宿換へ致候、其日の内
に半永久的の住居を定めよう云ふんだから無理な相談ではあるが幸に親
切な眞面目な家庭にアツカツタ事は何よりの幸福に御座候、爾來地圖を相
手に盲滅法に飛び歩き到る所の「レストラン」を食ひ廻はり今では常定めの
所も出来大に見當つき心丈夫に相成候

當地には日本人が大分居る由なるも小生はまるで人里離れたやうな生活を
致し寂しき事限りなく只日本婆の内に同船したる一人ある切りそれも遠
いので二三度行つたばかり、ホルンブランドと云ふ婆さんはそれはく
は愛嬌のよい婆さんにて行く毎に笑顔にて迎ひ申候其處には他に日本人が
五六人も居り三度く日本食が食へる由羨ましき事にて小生日本食に別れ
た馬耳塞の船以來正味一ヶ月を過し申候、日本妾方に十五六の日本兼茶目
の少年が居て「グーテン タツハ、ヘルドクトル」と申候寂しいは寂しいが
結局一人が氣樂に有之候

一人で何もかもやつたが困つたのは大學の手續きが少しも解らず無駄足を
屢使つた位にてやればやれるものに御座候但し言葉には閉口に御座候、車
掌巡查の類なれば吾々にも多少は解り申候へ共所謂バイエルン訛りをやる
奴になるぞ喋つて居るのがさて獨逸語やら朝鮮語やらさへも解り申さず候
「アインマル」を「アマル」と云ひ「マン」を「マ」と云ふはまだしもなるも「ジ
ンド」を「ザン」と云ひ「ハーベン」を「ホム」と云ふが如きは言語同斷にて「ア
ツフ グライヒ ノ ホイヒ」等の「チエハ」は切り棄て御免「ア グライノ
イ」も申候母音の「エ」は大概響かざる候、こんな事は覺はずとも用は達し申
候へども解らないのは誠に不愉快なものにて癪にさわり申候、中には先生

を取つてやり直くをやつて居る人もある由なれども小生には其根氣無之
候、小學生などは反つて正しく候小生迷子になると必ず子供をつかまへて
聞く事に致し居候小生の下宿の近所は殊にやゝこしく事程左様に近くで迷
子になること多く候來て一週間ほど経つた頃迷子になつて困つて居る處へ
三人の小學生通り候故此奴に聞かばやそ存じ候處あべこべに「ヤーンスト
ラーセは何處だ」と申逃出し面喰はし申候何でも此の邊に住む悪太郎にて
二三度も尋れた事のある奴等と見ゆ今日は大勢を頼んで遊藝をやつたんだ
なと思はず吹き出し申候、當地の詳細は己に先輩の盡したる處改めて云ふ
程の特長も見出さず只途上「メンツル」の劍痕ある學生の徘徊すると「ロー
ルフアス」を引張る馬の遅しきと途上此寒いの半身胸あらわなる婦人の
多きと電車の車掌の風彩堂々たると巡查のいかめしきは目に付き申候先日
はツエツペリンの「ルフトシフ」を見物に「レストラン」で近か付きになつた
若し紳士と連れたちて郊外迄出掛け申候西洋人の親切なるは嬉れしく候下
宿に歸つてフラウに話したらば目を丸くして用心をしない時と時にロドイ目
に遭ふ事があると注告致候、然し其人は全くの好人物にて今次は「メンツ
ル」に案内せらるゝ約束に御座候、先づは長い旅行日記も茲に筆擱き申候
此度は御地よりの御通信鶴首して待入候頓首

●林篤氏通信 (佐々木教授宛)

謹啓追々寒氣に相向候處御機嫌如何に御座候か何上候降而小生義相不變無
事日々通學致居候條乍他事御安心被下度候爾來御無音仕居候處岡本兄より
の通信にて過日來御不快にて御臥床相成り居候由頓と了知不仕失禮仕候然
し最早御快癒にて御離床との御事安神仕候何卒角御自重被遊度願上候學
校卒業試験も最早了の事と存じ従つて引き續き彼是れと御多忙と存候山
本君も週餘當地に滞在の上民賢へ赴き目下マイ教授の下に入學致候由通信

有之候何れ詳細は本人より御通信致す事と存上候、加藤君今般醫化學講座擔任と相成候由母校の爲め慶賀の至りに候御遇ひの節は宜ろしく御傳聲被下度候。小生も己に滿一ヶ年以上経過致し時日の早きには驚き入り候其後當地に別に變つた事も無之漸く本月上旬より新學期と相成候シユミーデベルヒ先生も何分七十才の高齡元氣ありと雖も老耄の傾き然し引き續き講義をなし居られ候ホーフマイスタ。病理のキアリは老いたり雖も尙豊饒たるものに候伯林小兒科ホイブネル教授愈々來年二月を以て通退と決定後任として當教室のチエルニーの榮轉も亦内定致候就而は小生も此機を利用し來年夏學期より何れか他の大學へ轉學致し又變はりたる方針を學ぶも得策と存じ次回の留學地を考へ居候

當地も追々寒氣を増し去る三月初雪有之候朝夕の冷氣身しみ申候
右御伺旁々如斯に御座候乍憚高安、山礪両先生を始め諸先生へ御面會の節は宜ろしく願上候頓首 (大正元年十一月十日)

●富山同窓會記事

楯を飾りし紅葉、影も無く去りて木枯し荒ぶ年の暮れ十一月二十五日とはなりぬ、所は富山ホテル樓上紀念の間、電燈花やかに輝きて敷き列ぶ布團の主待ち顔なる午後六時、東より西より集ひ來る面々、一つ學びの庭に人と成りし同胞學友、早や此所にも彼所にも場の静けさを破りて、温かき談話、遠慮なしの快談繰組し合せての樂しさ、他所の見る目も羨しき極みなれ七時と云ふに酒盃は擧げられ、酔ふては意氣衝天、或は昔を語りて人の願を解き、或は未來を談じて人膽を奪へ、時に取りて美妓仙女も、虹の如き氣焔には自然自失して爲す所を知らず、歌舞の興は出でざるも温かき情趣は自然と溢れて四隣に快を送りぬ、想ひ會する者二十有二、仁を業とする醫師に非ずば愛を旨とする藥劑師、換言せり富山一流の士のみ是を

紳士の會合と云はずして何ぞや、同窓の情誼に加味するに紳士の人格を以てす、それ如何に高潔親睦なる事よ、一露の拍手は幹事堀米太郎君の辞を迎ぬぬ、君は本會開會の主旨を述べ併て一年志願兵として入營すべき小西眞清君の送別の意を兼ね度き由を述べらる、次で小西君立て謝意を陳して、會は益々佳境に入り、「メス」取る手、聽診器持つ手、匙操る手、徳利もつ手、入り亂れては纏はり、もつれてはもつれて同窓の情誼は緊く、相互の心を縛して止む所なし、………夜は更けぬ吾れも人も酔ぬぬ、盡きぬ名残りば次會に、家路を辿る我が袖に露は含りて、霜月の天暗し。

當日の出席會員の氏名、職業を附記す

當日の幹事 堀 泰次郎 (全科開業)

金岡 清彦 (藥局藥種)

水上 峯太郎 (内科開業)

末岡 外次郎 (同)

田上 清貞 (眼科)

中田 徳次郎 (藥種藥局)

村澤 金廣 (廣貫堂主、市會議長)

高田 範國 (小兒科)

長澤 安弘 (耳鼻咽喉)

加納 景成 (耳鼻咽喉)

近郷 重孝 (皮膚花柳梅)

片山 良作 (眼科)

井本 清吉 (婦産科)

城石 健治 (眼科)

坂井 茂 (齒科口腔科)

織田 秀時 (内科、婦人科)

松井 長兵衛 (藥種藥局)

森 正 英 (廣貫堂技師)

高木 安 治 (赤十字病院内科)

福田 美 明 (腦神經科、内科)

小西 眞 清 (内科)

阿波加 寛 吉 (赤十字病院内科)

○今回入營せらるゝ小西眞清君は昨年卒業にして松原博士の下に研究次て當市高田小兒科院に副院長となり本夏以來自宅に於て開業せられしが國民の最大義務を果すべく軍醫生として七聯隊へ入隊せらるゝ事となりぬ、謹んで同窓會が送別の誠意を致す所、願はくは健康に一層留意せられ一年有餘の軍隊生活を終了せられんことを切望す。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

校 内 雜 報

● 講話會例會 (十月二十六日)

午前の授業を終へて、午後二時開會。會場は、大校堂の豫定であつたが、都合上、第一教室へうつされた。

一、Körperliche Übung

石坂 義 正氏

都合により、本題は、次回に廻して、本日は、本校學生の体格に付いて述べた。近年本校學生間に、疾病の劇増したことを、一見明瞭な統計表に示す、其の原因や豫防策の、研究せらるべきを痛快に論じた。

此の時、會長席から、高安先生が立たれて、十全會々則第一條をあげて、此の説に賛し、聽衆を刺戟せられた。

二、所 感

川 島 俊氏

講話部の振興策や、學術實習部擴張の必要や、運動會を廢して、懸賞講話部を設けたい事やを、面白く説明せられた。——余の理想が實現せらるゝ曉には、徹夜神經衰弱、あらゆる不自然を伴ふ、試験制度の如きは自然消滅するであらう——と、長鬚を拂つて、降壇せらる。

三、正宗を載きたる吾等

石川 義 助氏

講話部の演壇へは、之れが初陣ぢやと云ふ。——我等は、新校舎と共に、新しい精神を得た。それを正宗の名刀とする。我等は、之れを研磨すべき責任がある。自ら作れる規則がある。此の正宗を、世界の名刀たらしむる秘訣は、研磨する人の決心にある。そして研磨する方法の如何にある。

四、雜感一束

眞下眞一郎氏

恐れ多い今秋の愁いさりとて吾等は此の悲しみを負ふて勉勵しなければならぬ。——と云ふ事から、所感數條を述べ、感餘つて、高利貸、質屋の攻撃に迄及んだ。演説は藝術であること云ふ様な、此の態度、音色、かなり「パッセ」が長かつた。

五、圖書館に就いて

田中吉左衛門氏

神經後根の研究、「アメリカ」發見、望遠鏡發明等、昔の學者が、如何に苦心したのであらふか。今日の學生は、より大なる研究がなければならぬ。それには、位置の選定や、時間の節約やの關係から、自然圖書館の必要が起つて来る。今後諸君の決心一つで、我が圖書館は、設備も完全し、珍書も充満するであらふ。——と、終りに、科學研究の極点を、倫理、宗教に一致せしめた。

六、小希望

村山 良 平氏

醫學發展の歴史を尋れ、今日醫學の尙幼稚であつて、吾等の前途遠なる

を想へば、ひたすら、健康を重んずべきであらふ——と要するに、大希望であつた。

七、自炊の日記

伊藤忠 一氏

日露戦争後、我國外債償却のほかげかしからざるに、露國はすでに、五億圓の餘裕がある。これ等は皆、國民個人の經濟に依るだらふと、人に先んじて、自炊生活に入つた。また近時乃木將軍の殉死により、思ひ起す其の人の性格に、刺せられて、益々所存の膽が固まつた。自炊の動機を述べた。

八、歐洲精神 學界

松原 先生

「サイーン」の精神病學界は、現在余り盛でないが、古くは有名な學者もあつた。中にも古マイネルト氏は、精神病學者としての外に、腦解剖學者として、顯はれた、其後クラフト、エビング氏は、臨床的腦中經過により、疾病を分類して、甲より乙に變じ得るものとした。此の隱退後を、ワグネル氏が繼承したが、何等特色が無い。然し尙邦留學生の、絶わぬのは、カーベルスタイン氏あるが爲めである。此の研究所は、近時政府維持の下に、腦脊髓の生理的及び病理的、就中脊髓傳達道路の研究をして居るので、之等の進歩は、ミュンヘンに劣らない。

スタインホフの病院は、敷地面積約四十四万坪、三千人の患者を收容する事が出来る。病院と云ふよりは、むしろ町である。地形は階段状をなして、後方に高まり、最後に壯麗な大寺院がある。斯くの如く他に類を見ない、大病院であるけれども、學界に對しては、貢獻する所がない。特に不安なる患者に對する處置などは、變的極まるものがある——と、いつもの如く、數種の圖を掲げて、説明せられた。

九、偶感

金子 先生

人間が社會に處するには、沈思熟考が無ければならない。此の反對を輕卒浮薄とて云はふか。此の老人が、後者の爲めに、自己の失敗談を懺悔し

やう——と、多くの例を挙げ、先生の失敗談を述べ、學生を訓戒せられた。

午後六時、燈火の下に會長閉會の辭を述べられた。——庭の小松も、秋の夜の景物をあやまらない。何處かで、蟲が鳴いて居る。馬鹿に響く聲だ、想像深い、君子の大膽には、次回に廻した柳露子の「玉の夕聲」も私語いてゐるだらふ。

盡きざるを閉會す灯取り蟲も居て

(おく羅坊記)

●那谷ゆき (三年級々會十一月十七日)

輕き雨の音に眠りは破られた、昨夜今日一日の色々の空想を抱いて来た胸には氣抜けた感じが起らない譯にはゆかなかつた、雨戸を繰ればほのほの〜と明けゆく東の山の端はそれでも雲がきれてゐた、「きつと露れるに違ひない。」こゝ獨心に睨いて出發の仕度をする、聽て宿を出ると其出會頭にまたバラ〜と雨がふつてきた、けれども今こなたで引き返す氣にもならない、「まゝよ獨でもい〜から行つて來うと停車場へ急いだ、停車場の通りから遙かに瞳を投げる。級長先生が例の歐米を漫遊してきたといふハットを被つて人待ち顔に佇んでおられるのが眼についた、私の胸には嬉しい曙光が輝いた、時間までに集まつてきた者無量十二人、朝雨が降つてゐた。と云ひ乍らあまりに人數が少かつた、兎も角も七時二十分の汽車に搭つた。

野々市を過ぎて左所すれば越路の山々は已に白衣を纏うてゐる「秋すぎて冬來るらし眞白にぞ越の山路に雪ぞふりける。」松任を通り美川を過ぎ手取の川瀬を走り乍ら右顧すれば日本海の波濤澎湃として打ち寄るさま秋といふ心の感觸に益々詩趣を添へるのである。

小松へきた、停車場は人波を打つてゐる、さて何事であらう？大谷派本願寺前法主の來錫といふことが知れた、新聞を見るに僕等も同汽車に搭つてゐられるらしい、坊主の力ほごほらいもんだなア」こ頻りに嘆聲を發してゐる。汽車にのつて間もなく雲が消れて小舞子の松原を走つてゐる頃はカラリと晴れてゐた、誰かが「松原晴れ」だと言ふ。松原をぬけて水田の間を走る、お日さんの光がキラ／＼と漣に反射し畦の稻架の彼方に葦屋の屋根が見えてそれよりも高い梢は淋しく黄ばんでゐる、何といふ詩趣でせう、私等は静寂なこの秋の朝を汽車にのつてこの景色に接して已に豫想以上の感じを得ました、況んやこれからなほ秋深い田舎のあたりを師の君と學びの友達とが無邪氣な語に足の進むを知らなかつた愉快さ私はこの主觀的な叙情的な秋の景色の讚美をひさし擲にするにしのびなかつた、筆は拙く時は遅く充分に記述することは出来ないが聊にても今日一日のことを諸君に想はずことを得ばと重き筆を呵して紙面を汚します。

動橋へ着いたのは九時頃であつた、この停車場でも坊主を拜むための群衆が雪崩を打つてゐる、中には合掌唱名のみで満足せず賽錢を車中へ投げこんだ者もある、今更宗教の大なる力を思はない譯にはゆきませんでした。僕等も汽車を捨て、から脱帽して敬意を表した。その後の方にぬたさがな口がS君の頭はヒリケンの様だと意外に大きな聲で叫んだ、ドツと笑つたので田舎人は怪訝な顔をして僕等を見てゐた。

淋しいけれども何處かに平安を思はず様な山の水々其中に一面に温いそして心を和ませればならぬ十一月半ばの日光が溢つてゐる、さういふ様な景色の間を先生を取り巻いて打ち語りつゝ歩いた、暫く歩いたと思ふとはや那谷である、馬鹿に近い、と思つて時計を見るに十時頃であつた、樹木深遠山勢優容なる那谷寺の境内、何處からか大工の槌の音が漂うて来る、人口の石碑の辭をむしつて判明せぬ字を寄り合つて讀んだ、「こ、娑婆を電光朝露と聞あけは彌陀たのまるゝ人ぞめでたき」。

お寺の坊さんに導かれて左に岩山を仰ぎ右に小丘を顧みて廢窟の大悲閣へ參拜した。坊さんは徐に那谷寺の縁記を解かれた、其大要はこゝである「當山は人皇四十四代養老元年かの有名なる越智の泰澄大和尚が妙理菩薩の靈告によつて白山を開拓する根據とて開かれた靈刹でもと廢谷寺と稱したのである後、花山法皇が北國に三十三所の靈場を草創せんと思ひ立たれ此地の幽邃なのをめで給ひ勅して那谷寺と改名せられた、その所以は那智及谷汲の各頭字を取つて名けられたのだとして千手觀音を安置してある」さういふ。坊さんは語を更めて曰く「凡そ人は無我の境に入らねばならぬゴージン(吾人)は父母より此の身体をうけたものである、そして父母に孝を致すはゴージンが君に忠なる所以である思はまたゴージンが無我に入るの第一階梯である」と云ひ終つて得々たるものである、ゴージンを幾度も繰り返して言はれたので後の方に苦笑してゐる者があつた。坊さんに別れてから各自思ひ／＼に岩山へ登つた、そ／＼に聲は立つてゐる岩には所々侵蝕せられた痕が見ゆる、京都大學の比企教授によれば之等は凡そ火山岩に屬し石英粗面岩安山岩の類より成り瑪瑙や貴蛋白石などもあるさういふことである。私は太古これらの岩漿が地表から噴出してゐたことなどを回想し今更の様に自然の偉大な力を感じました、瞳を脚下に注ぐとそこに湛々たる池がある、紅葉は已に遅いが尙ほ眺望に價せぬものがないでもない。且又岩角に縋つて岩石を下つて後散り敷いた紅葉を踏んで或は傘亭に入り或は三重の塔を訪ひ芭蕉塚を探るなど反つて詩的情緒が湧いて來るのである、塚に曰く「石山の石より白し秋の風」。

那谷で晝飯を食つた其間氣焔万夫奇語百出頤を解かざるを得なかつた。十二時那谷を辭して粟津に向ふ、十方玲瓏なる山越の秋の空氣を吸ひ落葉樹のやばらかに並び立つ山と山との間の道を通りぬけて粟津に着いたのは一時頃であつた、善吾樓の三十六疊の大廣間へ案内せられて、食ふ喋る飲む少しの暇も口が休まない。聽て硫化水素の臭をかきながら温泉の快感を

味ひ充分の歡を盡して粟津を去つたのは五時前であつた。歸路車中幾度か那谷の坊さんのゴーションが繰り返へされた金澤驛へ下りてから元氣よくクラス會の方歳を三唱して散會した。嗚呼愉快なりし日よ。吾々の身神が今日一日中に得たる處決して少なからざることを信じて疑はないのである。

●醫科四年忘年級會記 (十二月九日)

年忘れ又も財布の煤拂ひ。

鬼の來るてふ師走の空、誰の財布も黒雲蜜布して満糞空しと云ひたそうな今日此頃、サー級會だ、忘年だ……明日は且那の……待て〜三日も前から今日出せ、今出せと火の付く様な催促、幾ら鬼の月さば云へ餘りさ云へば聞かない、大藏會の財政困難は尙依然として廻さんに車もない此の時節、さりさて無下に鶯の聲さも行かず……孫末代鬼にはせじと悟つたりな年の暮……一夜は明けて今日は級會、場所は病院會議室、時は十二月九日午後二時、此んな事を思つているさ、前座露拂ひの役目嚴かに後岡君昨日の鬼は今日の何さか、ポケットの重さに勝まで下つたかご……かは知られど、皆さん餘り福々しからぬ御面相と見てかあらぬか、ピリッケン宗世渡り學第一章自己廣告の御復習へ、法螺も吹くべし擴げるべからず、喇叭も時に一種の風音あり、以て自信の勝利者たるを得ば上乘さ、有難い哉福の神！來年は勿々鼻の下に心配のある御互様、物試し一ツやつて見て代は御歸へり御勝手たり隨喜の涙も注ぐも注かざるも御心委せ、扱て持ちたくもない貧乏世帯。

二番茶は田中君前の御茶菓子に六月以來創設の始めから殆ど一人で御厄介を煩している圖書室又も今度は春の御目見へを内科研究室で晝夜兼行やりますから御祝儀ごつきり賑々しく御光來の程をネガヒアゲ……因に此の

一年中にせめて型だけなりとドクトルらしく本でも讀んで成つて貰ひたいさ、親の心を誰ぞ知る仇に聞くまい悴共當らぬ先の棒に御要心！學校も後向ふ六ヶ月、さらば明春は雜煮祝つて晴々敷總見物、指折つて來る年を待たん哉

次がいよ〜今日の本膳、煩はしたのは八坂松山寺の山内師昨日が丁度臘八だからと釋尊はじめ雲門禪師の悟道修業談を説かれて天地と人、人心、心さ法、と諄々切々滾々法門の一義を教へらる〜一時餘、偈に曰

雲門秘在形山

舉雲門示衆云乾坤之内宇宙之間。中有二實二秘二在形山一。

枯二燈籠一向二佛殿裏。將二山門一來二燈籠上一。

頌 日

看々。古岸何人把二釣竿一。雲再々。水漫々。

明月藍花君自看。

と天地一体、心身即一、二即一、たる不斷の妙趣ある氣の鍛鍊を説いて詳なり、實にや氣は天地宇宙に充ちて本自即一、萬衆皆一氣、一氣百變して百花開き干轉して干草萌ゆ山峙水流、雲屯雨下、正邪賢愚、通塞伸屈、春烘秋冷又一氣の剖判、施曲折、衝突、交錯して生ず、合すれば蕩々洗々の一氣となる師の所謂形山之實、本來皆物より生ずる處の希微にして知る不可、捉ふ不可、而かも之れ物の本態にして微分子なるが如く一にして二、二にして一、氣あれば物あり物と氣と失へば即ち物たらざる之れを形山秘藏の一實と云ふ靜かなる物をせば動くものば之れ氣たらん乎要は探つて以て水漫々雲再々の境界に遊ばしめん工夫のみ。終つて菓子が出る下平級長の諸子の希望と矛盾についてさて注意單簡兼ねて閉會の辭があつて御終ひ苦い御茶受けと云ふ格なり之れを歳末御祝儀胃病の妙薬と目出度き今日の年忘れ、笑つて手を拍つたのが四時半、此日御來會を辱したのは松原、阿部、藏光の諸先生、斯くてブラリ寒い雨と風の小立野をわのがじ〜塘へ

さらば悲しかりし年よ、また來ん春の花を頼みに一先今年の筆洗ひ名所案内に代へて。

逝く年を鬼の笑ふや除夜の鐘

芳 坊

●卒業證書授與式

十一月十二日午後二時より本校大講堂に於て第二十五回卒業證書授與式を舉行せらる、定刻教授職員及生徒入場、高安校長起つて戊申證書を奉讀せられ、証書授與に移る、即卒業者左の如し。

醫學科

(百九名)

雨森 良順	島 居 環	小池 才一
喜多 禎次	村山 三男三郎	藤岡 係喜
丸谷 定雄	富田 豐咲	金田 友三郎
根布 定吉	上野 辰太郎	白木 孝一
藤卷 敏太郎	高崎 文雄	篠田 嘉年
安藤 儔次	齋藤 金則	鈴木 康一
丸山 浩平	的場 貞行	吉川 誠
笠島 宗之	青木 國三郎	岩田 高明
源明 藤吉	藤澤 好彦	宇山 春禧
端谷 豐吉	今村 鐵夫	永山 昇一
高橋 邦次郎	安江 芳雄	木下 熙
竹内 善松	飯田 豐	河口 二郎
田邊 鼎介	關山 信作	北村 清太郎
正印 義正	小山 角次郎	小池 勇助
加勢 基	大島 重雄	秋田 哲
岡田 申吉	廣瀬 勇	松山 金治郎

藥

馬場 稠	稻垣 久實	杉原 周輔
中田 秀貞	野坂 賢藏	吉見 昌造
住吉 三郎	吉田 稔	岡田 新雄
島 豐喜	楠田 利二郎	越村 甚次郎
西東 榮次郎	岩佐 利一	楠野 末太郎
伊藤 芳雄	福里 次吉	大脇 彌平
北浦 德太郎	川村 二郎	西野 勝藏
神戶 政雄	村上 伸太郎	上原 成之
吉尾 甚喜知	米元 正雄	山川 匡男
宮本 品太郎	青木 伸一	上島 耕治
山角 稟晏	向井 喜内	六田 芳輝
古屋 菊男	本 正生	水谷 眞鐵
八田 三郎	重松 俊明	柳瀬 仁三
駒田 作之進	賀川 見龍	春田 信行
佐藤 彌一郎	中原 重吉	渥美 德太郎
沖 爲次郎	五十嵐 齊	武田 眞海
石渡 七郎	赤澤 眞次郎	近澤 信盛
戸澤 和一	村上 錦六	寛永 義長
内田 憲男	武内 勉二	竹越 大三郎
磯田 昇平	中島 正一	深瀬 陸真
渡邊 仲四郎		
藥學科	(十九人)	
岡田 一郎	柴田 寅次郎	大西 政三
吉田 一郎	村田 義直	伊藤 磨他雄
谷 量太	末岡 愛一	野口 次郎
藤本 泰治	大田 彦八	田中 幸吉

西岡半三 中出長松 藤田研二
 金森又一 手塚歎二 堀部良吉
 森田次郎

次で優等生左記四名に銀時計一個宛授與せられたり。

醫學科 雨森良順 鳥居環 小池才一

藥學科 岡田一郎

次で高橋邦二郎氏に左記薦記按を授與せられ且同氏が十全會の事業に盡力せられたるを感謝し表彰記念として花瓶一個を本會より贈呈せり。

薦記按

性深沈にして才幹あり、稍晩學に屬して而も魂守克く勉め出精尋常ならず、志尙亦可なり、同窓爲に風化する所多く象皆推服す、今や卒業して將に校門を辭せんとするに當り茲に之を表彰す

大正元年十一月十二日

金澤醫學專門學校長 高安右人

次に雨森良順氏に病理學成績優等に付小原芳雄獎學賞としてカルテン氏著病理組織學的検査法一部及ウカルフアルト小田切良太郎共著獨和辞典一部を授與せらる。

因に該獎學賞は曾て本校講師にして篤學の名ありし小原芳雄氏が明治十四年一月六日死去せられたる時八田智証氏等發起となり金貳百貳拾五圓を醸出して之を基金とし其利子を以て明治四十五年以降の卒業生中病理學成績優等者に學賞を授與すること定められたるものなり。
 稍ありて醫學科卒業生總代雨森良順氏及藥學科卒業生總代岡田一郎氏の答辭ありて式終り、小憩の後茶話會に移る。

●圖書室月報

霜葉を返す秋風の暮影高く空の明鏡に現れ出でし圖書室は、春陽又も明けなん天鼓の聲勇ましく盛裝、更に内科研究室に打つて出でんさす、希くは會友諸氏の接踵來室の程を、因に開設以來、寄贈を辱ふしたる氏名並に盡名次の如し、謹て感謝の意を表し併て陸續御寄附の榮を賜はらん事を乞ふ。

(書名)	(冊數)	(氏名)
一 診斷學	二冊	下平用 彩殿
一 最新眼科全書	全三冊	高安右 人殿
一 新纂外科各論(前篇上、後篇上、下)	三冊	下平用 彩殿
一 新撰生理學	全三冊	購買 會殿
一 井上内科新書	全四冊	全 上
一 婦人科診斷及治療學	全一冊	全 上
一 産科學講義	全三冊	全 上
一 精神病診斷及治療學	全二冊	全 上
一 細胞及組織論完	一冊	金子治 耶殿

●支那語研究會

十月末發會の式を舉げてより着々其の研究の歩武を進めつゝある全會は今次新たに又李講師を迎へて組織稍見る可きものあらんとするに至れり斯くやがては極東中天の空に風雨を卷いて勇飛せんとする有志諸君の意氣や詢に壯さすべきものあり今や會則成ること云ふ掲げ以て其の發展と層倍諸君の參會を切望す。

一、本會は金澤醫學專門學校支那語研究會と稱す。

二、本會は支那語研究を以て目的とす。

三、本會は本校に縁故ある有志者を以て組織す。

四、本會は會長及講師、委員各若干名を置き會長は會務を總攬し委員は其庶務に任す。

但委員は通常會員の互選によりて之れを定め會長の許可を得べきものとす。

五、會員を別ちて賛成特別通常の三とし賛助會員は本會の援助者を以て特別會員は本語研究有志の先輩を以て通常會員は有志生徒より成るものとす。

六、附則

イ、會費は出席の有無に不拘毎月七日迄に委員に交附すべき事。

ロ、入會希望者は其旨委員に通し所定の會員証を受取るべし。

ハ、退會希望者は其旨委員に通し會員証を返附するにあらずんば依然會員たるべき責に任す。

●須藤。石阪。土肥三教授を迎ふ

明治の舊舞臺は去りて大正の新幕は開かれ諸事改元と共に新に發展して止まず此の幸運に乗じて吾校更らに新進氣鋭の三教授を迎ふるを得たるは吾人の愉快之に過ぐるものなし須藤教授は我國醫學界の白眉にして世人未だ醫化學の必要を解せざるに先だち醫化學の鼻祖たる隈川博士と共に二十年間以上斯學の研究に従ひて多數の業績を公にし其博學は全氏の著書と共に我國獨歩たり昨年文部省の被擢する所となり獨乙に留學して今伯林にあり蓋し普通の醫化學は既に研究し盡して亦氏の顧るべき餘地なきを以て今や血清化學の研索に志し新生面の繩奥を極められつゝあり。

石坂教授は東京大學卒業後直ちに大澤謙二博士の下に生理學を研究しなが

ら本校講師となりて數年を経過し一昨年二月官命を帯びて獨逸に留學し今尙ほ斯學の大家に親炙せられつゝあり全教授は本年二月歸期すべき筈なりしも更らに留學の期間を延期して來大正三年早春に歸朝せらるゝことなれり。吾人は此篤學にして前途甚だ有望の新教授を得て吾校に更に一段の光彩を添へたることを喜ばずんばあらず。

土肥教授は方今我國に於ける皮膚病及び花柳病學の泰斗たる土肥慶藏博士と共に斯學の双璧たり。全教授は皮膚病及花柳病學を研究するに先だちて臨床醫學の基礎たるべき病理學を研究し尙ほ進んで細菌學教室に止り或は外科學教室に入り其基礎固くして學識博く誠に臨床醫學研究方法の好模範を示さるゝものと謂ふべし。

●土肥教授畧歴

東京府平民舊名柴田章司

土肥章司

明治九年六月二十一日生

原籍 東京府東京市麴町區下二番町四十六番地

現住 同上

一明治二十一年四月東京英語學校(日本中學校)入學

一同二十六年四月同校四年級ニテ退學

一同二十六年五月ヨリ同三十年三月マテ舊東京醫學專門學校濟生學舎ニ通學

一同三十年五月内務省醫術開業試驗ニ及第シ九千九百九十號ヲ以テ醫籍ニ登錄セラレ

一同三十一年六月東京帝國大學醫科大學選科入學試驗ニ合格

一同三十一年八月ヨリ卅二年八月マテ東京帝國大學醫科大學教授醫學博士

佐藤三吉ニ就テ外科學研究

一同三十二年九月ヨリ卅三年八月マテ東京帝國大學醫科大學教授醫學博士

三浦守治及同教授醫學博士山極勝三郎ニ就テ病理學及病理解剖學研究

一同三十三年九月ヨリ三十四年八月マテ東京帝國大學醫科大學教授醫學博士

緒方正規ニ就テ衛生學及細菌學研究

一同三十四年九月ヨリ三十九年二月マテ東京帝國大學醫科大學教授醫學博士

土肥慶藏ニ就テ皮膚病微生物學及泌尿器病學研究

一同三十九年三月出發蘭領布哇バタビヤニ於ケルナイセル氏動物微生物實驗所ニ赴ク

一同三十九年五月ヨリ四十二年五月マテ獨逸國アレスラウ大學皮膚病微生物科教室ニ入り講師チーレル氏教授ナイセル氏ニ就テ研究

一同四十二年六月ヨリ同七月マテ伯林維納巴里ノ諸大學ニ修學旅行ヲナス

一同四十四年六月論文提出ニ依リ醫學博士ノ學位ヲ授與セラレ

●石阪教授畧歴

原籍 富山縣中新川郡早月加積村大字栗山村

二千九百九十三番地平民

石阪 伸 吉

明治十四年八月十日生

一明治三十一年四月東京獨逸學協會學校第四年級へ入學

一同三十三年四月同校卒業

一同年七月第一高等學校第三部へ入學同三十六年七月同校卒業

一同年同月東京帝國大學醫科大學へ入學四十年十二月二十日同科卒業

一同四十二年一月二十三日東京帝國大學醫科大學助手ニ任セラレ即日生理學教室勤務

一同四十二年七月十四日生理學講師ヲ囑託

一同四十二年十一月一日生理學研究ノ爲メ滿二箇年間獨逸國へ留學ヲ命ゼラル

●金澤病院の發展

今回土肥重司博士が金澤醫學專門學校教授に新任せられたるを機とし從來下平教授主任の金澤病院外科一部に包含せられし皮膚病及花柳病科を割きて新たに土肥博士を部長とし該病科を増設するに至れり。然れども該部を新たに建築するの豫算なきため先づ當分は外科一部の階上なる磨工部を外科研究室の一室に移轉して同新科の診察施術室となし醫員を二名となし一名を新任し他の一名は外科一部醫員より兼任することゝなるべし云ふ。尙ほ本年九月には林教授も歸朝せらるゝことなれば目下内科一部山崎教授の下に附屬しつつある小兒科の獨立を見るに至るべし。

此に於て内科一部。内科二部。神經科。小兒科。外科一部。外科二部。皮膚科。眼科。婦人科の九科を見るに至れり尙ほ此上耳鼻咽喉科及び整形外科の獨立して十一科さなるを得ば夫にて完成することゝなるべし。



叙任及辭令

●内閣

任金澤醫學專門學校教授

東京帝國大學醫科大學
助教授正六位醫學博士

須藤憲三

叙高等官四等

六級俸下賜 (十二月二日)

石阪伸吉

任金澤醫學專門學校教授

叙高等官六等

六級俸下賜 (十二月二日)

醫學博士 土肥章司

任金澤醫學專門學校教授

叙高等官六等

十級俸下賜 (十二月五日)

●宮内省

十月三十日

叙從七位

加藤寬

●文部省

十一月二十日

給三級俸

金澤醫學專門學校書記

山本兵三郎

給五級俸

給七級俸

金澤醫學專門學校助教 林常雄

金澤醫學專門學校書記 川島俊

●金澤醫學專門學校

十月十六日

細菌學衛生學副手ヲ囑託ス

加藤光澄

十月二十四日

金澤醫學專門學校書記 山本兵三郎

御用有之文部省建築課京都出張所へ出張ヲ命ス

十一月十六日

金澤醫學專門學校醫學士 藤岡孫喜

雇申付 (月俸金貳拾圓給與)

醫化學副手ヲ命ス

十一月二十七日

金澤醫學專門學校書記 山本兵三郎

富山福井ノ二市へ出張ヲ命ス

十二月十六日

金澤醫學專門學校雇 中野鑄太郎

自今月俸金貳拾參圓給與

金澤醫學專門學校雇 野崎芳孝

自今月俸金貳拾圓給與

金澤醫學專門學校雇 柴野順吾

自今月俸金拾九圓給與

金澤醫學專門學校雇 河西林藏

自今月俸金拾七圓給與

人事

●研究生許可 本年度卒業生にて各科学研究生を許可されたる諸君左の如し。

- 病理學 丸山浩平
 - 醫學 的場貞行
 - 神經科 小池才一 喜多禎次
 - 外科一部 白木孝一
 - 眼科 源明藤吉 端谷豐吉 加勢基
 - 產科婦人科 富田豐咲 野坂賢藏 岩佐利一
- 陸軍依託生** 大正元年度卒業陸軍衛生部依託生の見習醫官左の通各隊に分布服務せらる。

- 歩兵第七聯隊(金澤) 鳥居環 吉川誠
 - 歩兵第十聯隊(姫路) 青木伸一 小池勇助
 - 歩兵第三十七聯隊(大阪) 北村清太郎 向井喜内
 - 歩兵第三十八聯隊(伏見) 安江芳雄 島豐喜
 - 歩兵第五十四聯隊(岡山) 岩田高明 寛永義長
- 海軍醫學學生** 本年本校生徒志願者中醫學科第三學年石川縣出身中西與三次郎全科第二學年大阪府出身吉田憲吉の兩氏十二月十日付全軍醫學學生を命せられたり。

●安藤佐吉氏 (四十二年度卒業)仙臺輜重兵第二大隊附なりしが今回第二師團軍醫部部に轉任せられたり。

●鈴木正孝氏 (四十三年度卒業)氏は今回朝鮮濟洲島にある濟洲慈惠醫院に勤務さるゝ事となり去る十一月二十三日赴任の途に上らる。

●板谷外之助氏 (全上)は卒業後久しく市内牛塚醫院に勤務中なりしが今回石川縣警察醫を拜命せられたり。

●岡田申吉氏 (大正元年度卒業)は卒業後婦人科に研究中なりしが大聖寺江沼病院へ轉勤せられたり。

●杉原周輔氏 (全上)同じく婦人科に研究中なりしが今回京都帝國大學醫科大學婦人科教室にて研究せらる。

●轉居會員

- 佐世保軍港。軍艦警手(軍醫少監) 大西瀨治(三)
- 東京市淺草區瓦町二八 都築熊藏(五)
- 清國天津。北清派遣歩兵大隊本部 永井學造(七)
- 三重縣北牟婁郡相賀村 尾崎平吉(八)
- 石川縣羽咋郡越路村字千路 石橋三也(九)
- 橫濱市子安町字西町 芦澤昭(全)
- 金澤市明治生命保險會社醫 池野清政(四)
- 東京小石川區大塚仲町二四 井上元(全)
- 金澤市新堅町一丁目一〇四 岡勝重(四)
- 神奈川縣警察部衛生課 栢原直次郎(四)
- 仙臺第二師團軍醫部 安藤佐吉(全)
- 朝鮮濟洲島慈惠醫院 鈴木正孝(四)
- 東京市有隣生命保險會社醫 角田耕六(全)

福島縣立福島治療院

石川縣能美郡國府村字古府

石川縣金澤市櫻島八番丁十五、唐中方

高岡市河合病院內

大阪市北區絹笠町回生病院

神戸市東川崎町川崎造船所醫局

●居所不明會員

御存知の諸君は御手数ながら本會雜誌部へ御一報下され度願上候

舊 住 所

東京市芝養生園

大阪市東區京橋三丁目

能登國羽咋郡高濱町

石川縣能美郡小松町字京町

朝鮮京城旭町二丁目

東京陸軍々醫學校

長野縣小縣郡丸子村

台南衛戍病院

朝鮮大邱同仁病院

近衛工兵大隊(軍醫)

工兵第九大隊

兵庫縣神戸病院

門司市西川端町二丁目

獨乙國(ミュンヘン)市

高知縣高岡郡須崎古市町

相馬 甲五郎(全)

新次郎 吉(全)

加藤 末吉(全)

齋藤 金則(大元)

高橋 邦次郎(全)

楠野 末太郎(全)

園崎 純次郎(元)

森岡 惣太郎(全)

小林 五佐(全)

松村 四郎(三毛)

富久 尾溪(全)

江藤 潤一(全)

下村 義二郎(全)

後藤 義賢(全)

西尾 岱抱(全)

窪美 一久(三六)

西村 順八(三六)

本城 熊三郎(全)

戸井 源吉(全)

松久 祐馬(全)

藤井 茂(全)

近衛野砲兵聯隊

新潟縣中頸城郡新井町

兵庫縣柏原病院

栃木縣那須郡湯津上村佐良土

廣島縣高田郡吉田町

京都市上京區新蘇屋町通

京都府綴喜郡有智郷村字内里

福井縣立病院

札幌北一條四十四丁目

東京芝神谷町

靜岡縣駿東郡沼津町大字新町四〇四

大阪地方幼年學校(教官)

山口縣美禰郡赤江村宮原病院

朝鮮駐劄軍司令部附江原道原州守備隊

東京市神田區駿河台井上眼科病院

佐渡國羽茂村羽茂本郷

島根縣立病院內科

石川縣大聖寺永町

大阪市北區絹笠町回生病院

木下 節三(三)

鈴木 政治郎(全)

吉武 安男(全)

池谷 運平(四)

瀧澤 武藏(全)

内田 貞春(全)

水口 順(全)

五井 康平(全)

楠 正之(全)

松本文二(全)

山中 房次郎(全)

太田 勘市(全)

梶川 甚一(四)

中谷 內義雅(全)

河崎 正雄(全)

勝部 方策(四)

塚本 政次(全)

田村 實(四)

三上 儉次(全)

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

會 告

●自大正元年十月二十八日校外特別會員會費調書
至全 十二月十日

金額	期 限	氏 名
金壹圓	大正元年度分	石 橋 四 郎君
金參圓	自大正元年度 至大正三年度	中 原 重 吉君
金參圓	全	大 脇 彌 平君
金參圓	全	岩 佐 利 一君
金參圓	全	島 豐 喜君
金參圓	全	源 明 藤 吉君
金參圓	全	青 木 國 三 郎君
金參圓	全	駒 田 作 之 進君
金參圓	全	楠 野 末 太 郎君
金參圓	全	齊 藤 金 則君
金參圓	全	吉 川 誠君
金參圓	全	藤 卷 敏 太 郎君
金貳圓	全	渡 邊 光 生君
金貳圓	自四十四年度 至大正元年度	岡 勝 重君

金貳圓	自大正元年度 至大正三年度	野 村 亮 吉君
金壹圓	自大正元年度分	崎 達 郎君
金參圓	自大正元年度 至大正三年度	近 澤 信 盛君
金參圓	全	富 田 豐 咲君
金參圓	全	鈴 木 康 弋君
金五圓	自四十二年度 至大正元年度	田 中 健 次君
金參圓	自大正元年度 至大正三年度	篠 田 嘉 年君
金參圓	全	福 里 次 吉君
金貳圓	自四十二年度 至四十四年度	芦 澤 照君
金六圓	自三十八年度 至四十四年度	米 澤 茶 次君
金貳圓	自大正元年度 至大正三年度	井 原 悟君
金參圓	全	島 居 環君
金參圓	全	吉 見 昌 造君
金參圓	全	青 木 伸 一君
金參圓	全	五十嵐 齋君

以上